

日本語要旨一覧

雑誌名	Japan review : Journal of the International Research Center for Japanese Studies
巻	33
発行年	2019
URL	http://id.nii.ac.jp/1368/00007308/

SOYAMA Takeshi

School Excursions and Militarism:

Continuities in Touristic *Shūgaku Ryokō* from the Meiji Period to the Postwar

学校遠足と軍国主義

—明治期から戦後にかけての観光型修学旅行の連続性

明治中期に東京師範学校によって創始された修学旅行は、行軍と呼ばれる軍事教練と博物観察が一体となった、宿泊をともなう教育旅行であり、その後全国の師範学校と中学校に導入された。やがて、鉄道による移動方法が行軍にとってかわり、軍事教練と修学旅行は分離して、観光型修学旅行が修学旅行の定型となり、大正・昭和を通じて全国の学校で引き継がれることになった。日露戦争後に満韓修学旅行のブームが生じ、戦時体制下では敬神崇祖を目的に掲げた修学旅行の台頭があったが、こうした修学旅行においてもその基底には観光型修学旅行があった。観光型修学旅行の定型が変わらずに維持されたのは、それが明治中期から 1970 年代に至るまで生徒と父母、教員、同時代の社会にゆるやかに支持されつづけたからである。その要因としては第一に修学旅行が国民に広範に観光を提供したこと、第二に修学旅行がもたらす慰安と親睦を教員と生徒・児童たちが求めつづけたからである。

【修学旅行、師範学校、明治中期、行軍、博物観察、観光、鉄道、満洲・韓国、戦時体制、慰安・親睦】

Kate McDONALD

War, Firsthand, at a Distance: Battlefield Tourism and Conflicts of Memory in the Multiethnic Japanese Empire

戦争、間近にそして時空を経て——多民族的な大日本帝国の戦場観光と記憶相反

二〇三高地は日露戦争（1904–1905）において最も重要な戦場の一つだった。遼東半島先端の旅順市に位置し、大日本帝国の記憶をとどめる最重要かつ最大の激戦地でもある。本稿は二〇三高地の集団的記憶がいかになされたかを探る。ここでは1906年の最初の修学旅行に始まり、1930年代後半までにここを訪れた日本人と朝鮮人旅行者の視点からそれをたどるが、とくに領土とイデオロギーの変化によって記念行事がどう変わったかに注目する。日本の国家アイデンティティを作った場所としての二〇三高地の歴史はこの戦場物語の一面に過ぎない。この地を旅した朝鮮人の旅行記をもとに読むと、彼らにも日本人同様の強靱な国家アイデンティティが生まれていたことがわかる。

【ツアーガイド、集団的記憶、植民地主義、ナショナリズム、二〇三高地、満洲、日露戦争、キム・キョシン（金教臣）、日本、朝鮮】

OIKAWA Yoshinobu

National Rail and Tourism from the Russo-Japanese War to the Asia-Pacific War:

The Rise and Fall of a Business Approach to Rail Management

日露戦争～アジア太平洋戦争期の国有鉄道と観光

—「営業本位」の輸送体制の形成と崩壊

本稿は、日露戦争から第一次世界大戦を経て日中戦争、アジア太平洋戦争にいたる時期の国有鉄道の旅客運輸政策を検討し、戦争が観光にどのような影響を及ぼしたかを実証的に明らかにすることを課題としている。日露戦争の軍事輸送が鉄道の観光客輸送に及ぼした影響は限定的であった。そして、日露戦争後から第一次世界大戦期を経たのちの、いわゆる両大戦間期には訪日外国人観光客数が増えるとともに、旅行（観光）の大衆化が進展し、第二次世界大戦前の日本では空前の観光ブームが出現した。

国有鉄道は、木下淑夫運輸部営業課長のもとで「営業本位」の輸送体制を構築し、「旅客誘致型」の運輸政策を展開した。国鉄の旅客輸送人員は、第一次世界大戦後著しく増大し、その後、1931年に満州事変が起こり、33年に国際連盟を脱退して国際的孤立を深めても観光ブームは維持された。国鉄は1937年7月1日にダイヤを改正して営業本位の輸送体制をさらに発展させようとしたが、それから数日後の7月7日、日中両軍が北京郊外の盧溝橋で衝突して日中戦争が勃発すると、事態は大きく変わった。軍事輸送の比重が増大し、国鉄の経営は「旅客誘致型」から「国策輸送型」へと転換、長距離の特急列車や寝台車、食堂車が姿を消していった。低山登山や聖地巡礼など、戦争遂行のために役立つとされた旅行が奨励され、両大戦間期の観光ブームを支えた「旅行のための旅行」（赤井正二『旅行のモダニズム』ナカニシヤ書店、2016年）は否定されていたのである。

【国有鉄道、日露戦争、日中戦争、アジア太平洋戦争、木下淑夫、観光ブーム、旅行（観光）の大衆化、外客誘致、旅客誘致型、国策輸送型】

Andrew ELLIOTT

“Orient Calls”: Anglophone Travel Writing and Tourism as Propaganda during the Second Sino-Japanese War, 1937–1941

「東洋の呼び声」——第二次中日戦争〔日中戦争〕（1937–1945）期におけるプロパガンダとしての英語圏の旅行記および観光

1937年に日中間の全面戦争が勃発すると、英語圏の著者によるこの地域の旅行記が急増した。本稿はそのなかでも、日本を拠点に戦時下の中国へ旅行したトラベルライターたちの仕事をいくつか分析したい。こうした旅行は多くの場合、日本にある公式旅行会社が旅程を組み、ガイドをつけるなど、かなりの部分をお膳立てするもので、ガイドブックやパンフレット、ポスターも彼らが作成していた。これらの多くは東洋的異国趣味と近代性を比喩的に組み合わせた枠組みに観光地を納めてあるのが普通だ。帝国日本を肯定的に捉えてもらうためのプロパガンダとして国際的観光を利用するこの手法については多くの先行研究があるが、こうした旅行記を詳細に分析すると、このプロパガンダ戦略の成功、そして旅行環境の変化が強いた文言の改変について、より深く知ることができる。本稿ではこうした文献の多くが、日本と帝国の善良で平和的なイメージを強調し、アクセスが簡単でも異国情緒の味わえる観光地と紹介し、公式プロパガンダの目的に沿って戦争を覆い隠しあるいは戦争に馴れさせてきたこと、その過程で欧米のオリエンタリズムが、ヨーロッパの帝国主義ではなく日本の帝国主義を支える目的へと急激に変貌したことを論じる。文化外交としての観光の効用は中国の戦況ニュースによって結局は限定されたものの、こうした旅行記は、日本のナショナリストが第二次中日戦争と地域地政学に抱いたビジョンに旅行者を組み込み、教化ツールとしての効果を発揮した。

【英語圏の旅行記、異文化遭遇、異国趣味、帝国主義、日本、プロパガンダ、第二次中日戦争、オリエンタリズム、植民地観光、戦時の旅行】

Daniel MILNE

From Decoy to Cultural Mediator:

The Changing Uses of Tourism in Allied Troop Education about Japan, 1945–1949

おとり 囮 から文化の仲介者へ

—連合軍の日本教育における観光利用の変化（1945–1949）

本稿は「ミリツーリスト（militourist）の眼差し」——軍事と観光をつなぐ表現、認識、相互作用の方法——という概念を用いて、第二次世界大戦中および日本占領期の連合軍メディア、兵士の回想録、写真を分析し、兵士の教化に果たす観光の役割を述べようとするものである。第一節では戦争末期に出版された米軍人向けの日本ガイドブックが、その観光目線ゆえに日本の戦争計画に対するアメリカの理解を妨げたと非難されていることを示す。第二節と第三節では、終戦直後の被爆地観光やセックスツアーへの参加を通じて、連合軍の享受する占領特権がどう強化されたか。最後の二節では1940年代後半に時期を絞り、日本が冷戦の重要な同盟国として再登板するにつれ、占領軍兵士たちが次第に戦争を忘れるよう仕向けられ、かつての敵が作った戦前の観光宣伝に籠絡されていったことを示す。結論は、ミリツーリストの眼差しが、戦時中も占領期も連合軍兵士教化の道具になったこと、そして4年という短期間（1945–1949）で、憎悪と疑念の強化から友情と信頼の涵養へと兵士の教育の目的が変容したことである。ミリツーリストの眼差しは友好を築き、過去の憎しみに目をつぶって新たな戦争同盟を作るだけでなく、兵士を戦争に動員するためにも重要である。

【観光目線、観光兵士、ミリツーリズム、軍メディア、写真、教化、第二次世界大戦、占領、日本、異文化遭遇】

Tze M. LOO

“Paradise in a war zone”: The U.S. Military and Tourism in Okinawa, 1945–1972

「戦闘地域の楽園」——沖縄の米軍と観光（1945–1972）

沖縄では戦争と観光が複雑な関係のなかに存在している。その一つの現れが、沖縄本島における米軍の巨大なプレゼンスにもかかわらず、米軍基地とその人員が、県にとって主要な経済投資の対象であり、成長の期待される分野である観光に関する議論から外されることが多いという事実である。しかし米軍の人員は終戦直後、最初の沖縄観光客であり、米軍が彼らのために整備した観光景観の消費者であった。さらに、観光は27年にわたるアメリカの沖縄占領のしくみの一部を目の当たりにできる重要な窓でもある。本稿は占領当局が沖縄統治を想像し運営するにあたって、関与方法としての観光がどう機能したか、また軍の地上要員が駐屯^{ちゅうとん}という任務とどのように折り合い、それを理解してきたかを探る。

【沖縄、アメリカの占領、軍事基地、軍の人員と扶養者、観光客、ビーチリゾート、人対人プログラム】

Ran ZWIGENBERG

Hiroshima Castle and the Long Shadow of Militarism in Postwar Japan

広島城、そして軍国主義が戦後日本に落とす長い影

1945年、広島城は広島市中心部の大半とともに灰塵^{かいじん}に帰し、墓場と化した。大日本帝国陸軍中国軍管区司令部の置かれていた広島城では数万人の帝国陸軍兵士が死んだ。原爆によって物理的空間としての城が破壊されただけでなく、この場所の持つ象徴性も滅びた。広島城は長いあいだ軍都広島のアイデンティティ推進のために使われ、観光推進はこのアイデンティティを強固にする役割を果たしてきた。戦後、広島が「平和都市」として復興するとき、広島城および広島市と帝国陸軍との長い関わり
の歴史は忘れられ、市のシンボルは城から原爆ドームに移った。しかし広島城は市の過去を思い出させるものとして機能しつづけてきた。1958年の広島城再建は、日本全国の城郭と同様、非武装化を謳い、城郭が近代の軍政に果たした役割と切り離す趣旨で行なわれたことを本稿は指摘したい。保守派グループによる広島城復興の動きは多くの議論を巻き起こした。本稿は城と城をめぐる観光業を通して、日本が戦前は帝国へと動員し、敗戦後は広島過去の亡霊を祓おうとするなかで、地元のアイデンティティがいかに変貌したかを述べたい

【広島、城、観光、原爆、再建、戦争の記憶、地元アイデンティティ、軍事化、非軍事化、広島復興大博覧会】

UESUGI Kazuhiro

Selling the Naval Ports: Modern-Day Maizuru and Tourism

軍港都市を売り出せ——近現代の舞鶴とツーリズム

日本海軍は鎮守府を四つ設置し、その周辺は軍港都市として近代以降、新たに発展した。現在もなお海上自衛隊の地方隊が配備され、基地は旧海軍の施設を一部利用している。軍港都市におけるツーリズムを紐解くと、海軍を資源とした観光行動は戦前においてもみられたのであり、海軍が決してツーリズムの対象にならなかったわけではない。また、現在の日本には、海軍や鎮守府を資源とするコンテンツツーリズムが展開している。ただ、こうした海軍や軍港都市を対象とした観光は、これまで短い期間を対象とした検討しかなされてこなかった。しかし、現在の動向の特性を理解するためには、軍港都市の誕生から現在に至るまでの長期的な視点で観光をとらえることが必要だろう。

本稿では、近年、観光客の伸び率が軍港都市のなかでもっとも高い舞鶴を事例として、1900年代初期から現在に至る観光資源の展開や海軍に対する意識の変化をとらえた。そして、戦前は軍縮を契機としつつ、海軍が観光資源として利用されていたことをガイドブックや絵はがきなどから明らかにした。また戦後は、引き揚げが焦点化された時期、赤れんがが発見された時期、海軍を前面に押し出した観光ブランド戦略が実施される時期の大きく3つの時期に区分されることを確認し、海軍が明確に意識化されて観光と結びつけられていくのは、舞鶴の場合、2000年代後半以降であることを指摘した。近年の日本遺産の動きや海軍をモチーフとしたゲーム・アニメを資源化したコンテンツツーリズムの展開は、そうした流れの中で理解すべきである。

【軍港都市、海軍、舞鶴、観光、軍縮、遺産、博覧会、引き揚げ、赤れんが建物、コンテンツツーリズム】

FUKUMA Yoshiaki

The Construction of *Tokkō* Memorial Sites in Chiran and the Politics of “Risk-Free” Memories

特攻戦跡の成立と「無難さ」の政治学——知覧をめぐる記憶の戦後史

本稿は、「特攻の町」として知られる知覧において、戦跡観光がどのように成立するようになったのかについて歴史社会的に検討するものである。旧知覧町（現南九州市）の知覧特攻平和会館や特攻観音堂は、交通アクセスが悪いにもかかわらず、多くの観光客を集めている。しかし、特攻出撃したのは、全国各地から集められた陸軍パイロットたちであって、知覧住民ではない。それもあって、戦後の早い時期においては、知覧は決して「特攻の町」であることを強調しなかった。では、いつから知覧は「特攻の町」になったのか。そこには、どのような社会背景があったのか。こうした点を分析しながら、戦後日本における戦跡観光の構築プロセスを検討する。

【戦跡、戦争の記憶、知覧、特攻、戦後日本、メディア、ナショナルとローカル、レプリカ、他者の記憶の逆輸入、脱歴史化】

Andrea DE ANTONI

Down in a Hole: Dark Tourism, Haunted Places as Affective Meshworks,
and the Obliteration of Korean Laborers in Contemporary Kyoto

洞穴の中で——ダークツーリズムと感情のメッシュワークとしての心霊スポット、現代京都で抹消された朝鮮人労働者の存在

本稿は現代日本の心霊スポットで行なわれている（ダーク）ツーリズムに焦点を絞って、観光客の経験・感情・身体認識と、記憶および忘却のプロセスとの関係を分析する。注目点は、忘却の社会的特徴、記憶の作られるプロセスと戦争の言説、そしてその場所を構成する「メッシュワーク」（meshwork）内部における、これらの絡み合いである。筆者はとくに、心霊スポットとして名高い京都の清滝トンネルへのガイド付き幽霊ツアーを利用し、主にその民族誌的データを基に議論を展開する。観光客の経験について述べ、幽霊の噂を分析し、トンネルで死んだ朝鮮人労働者と彼らへの差別の記憶が地元民のあいだで戦略的に忘れられていることを示す。しかしこうした記憶は、心霊スポットに惹かれてそこを訪れた人々によって「発掘され」、ネット上に勝手に拡散されている。心霊スポットは「感情のメッシュワーク」として登場するが、それは物語や信仰からではなく、そもそも環境におけるアフォーダンスとの身体的交信の結果であること、また（ダーク）ツーリズムは新たな言説構築に貢献するため、権力関係を不安定化させることを指摘したい。（ダーク）ツーリズムの催行を通じて、身体、環境、記憶、言論のメッシュワークが構築されときの情動に着目することで、戦争や死に関連する場所を訪れる人々の経験が理解でき、それが新たな記憶と言説の構築に貢献することを述べる。

【ダークツーリズム、認識、情動と言論、社会的記憶、物質性、アフォーダンス、心霊スポット、幽霊、京都の朝鮮人、人類学】

Philip SEATON

Islands of “Dark” and “Light/Lite” Tourism:

War-Related Contents Tourism around the Seto Inland Sea

「ダーク」ツーリズムと「ライト」ツーリズムの島々

—瀬戸内海の戦争関連コンテンツ観光

本稿は瀬戸内海に浮かぶ五つの小島における戦争関連コンテンツツーリズムの現象を検討する。人口密度の高い日本の大半の大都市圏には、複雑な戦争の歴史が複数あり、それを記念する場所や観光スポットが網目のように存在するが、小島にはたった一つの戦争体験や記憶しかなく、それが観光客を引きつける持続的な観光資源となっている。そういう島々に注目してみると、映画、小説、ゲームなどのポピュラーカルチャーが戦争に関連する地に観光を生じさせていることがわかる。

第一に、戦争関連コンテンツ観光という概念は、ダークツーリズムという流行りの概念にからめて定義される。次に五つの島のケーススタディからその原動力を明らかにする。五つの島とは、大久野島（広島県：別名「ウサギの島」・毒ガス工場跡）、小豆島（香川県：映画『二十四の瞳』の舞台）、沖ノ島（和歌山県：海岸の砲台・現在はコスプレで有名）、大津島（山口県：人間魚雷「回天」の訓練基地）、能美島（広島県・江田島海軍兵学校跡）である。これらの島々はメディアツーリズムやコンテンツツーリズムの場でもあり、ここではエンタメというフォーマットや「レジャーとプレジャー（余暇と娯楽）」観光の促進に乗せて歴史が語られる。これは「ダークツーリズム」というよりは「ライトツーリズム」というほうが相応^{ふさわ}しいのではないか。

【戦争関連観光、ダークツーリズム、コンテンツツーリズム、遺産ツーリズム、ポピュラーカルチャー、日本、瀬戸内海、アジア太平洋戦争、コスプレ、映画】

Kenneth RUOFF

AFTERWORD

Wartime, War-Related, and National Heritage Tourism in Japan:

Where Do We Go From Here?

後記 日本における戦時および戦争関連、国家遺産のツーリズム

—われわれはここからどこへ向かうのか

この後記では、戦争、ツーリズム、近代日本をめぐる研究の今後の手法を議論の俎上に載せる。かかる研究のプロジェクトとして思い浮かぶのは、軍人・兵士による戦時ツーリズム、帝国日本最盛期の日本交通公社（JTB）の歴史、日本の変遷する遺産景観を対象とする戦後期まで及ぶ研究、近代東アジアでの儒教ツーリズム、そして抵抗のツーリズムの諸例であろう。

【日本交通公社（JTB）、帝国日本、遺産景観、儒教ツーリズム、抵抗のツーリズム】